

上田秋成の句題和歌

——中国文学受容の一端——

李 婷

一 はじめに

上田秋成の歌文集『藤簾冊子』^{つづらぶみ}は、秋成七十賀を記念して、秋成最晩年の弟子、昇道によって編纂され、文化二年（一八〇五）に前半三巻、文化三、四年にかけて全六巻六冊が刊行された。この『藤簾冊子』の巻一・二には「藻屑」として、屏風歌を巻一に、四季雑を巻二に収めている。^①この雑部に漢詩句を題とする和歌、即ち句題和歌が見え、六首の歌群を成している。

竹与心俱空（たけとこころとともにむなし）

①ためずとも直き心はおのづから竹とくもにやむなしかるべき

野渡無人船自横（やとひとなくふねおのづからよこたふ）

②冬枯の野川の風を身にしめてあはれやひとりおたり呼声

世人結_レ交用_二黄金_一（せじんまじはりをむすぶにわうごんをもちふ）

③交りをこがねにむすぶ世の人のつひのこころぞつねなかりける

白眼看_二他世上人_一（はくがんもてたのせじやうのひとをみる）

④よの中の人をさくればおのづから塵なき庭の松の下臥

悔教_三夫婿_二封侯_一（くゆらくはふせいをしてほうこうをもとめせしめしを）

⑤何にかく出し立けん剣太刀名のをしけくも今はあらなくに

調与_二時人_一背、心将_二静者論_一（てうはじじんとそむきこころはせいじやのろんをもつてす）

⑥我をしる人しなれば我しらぬ人に見すべきこと草もなし

この『藤篋冊子』の編纂は弟子の手になるものであり、刊行について秋成自身は、「うたて、をこわざするかな。世にはひわたらんほどは、必しも有まじきしわざ也」と言って止めた、と昇道の「附言」にある。しかし、同「附言」には、「ゆるしなきには、題号だにも書あらはさず」、とも記しており、編集についても、秋成の意図が反映されたものと見なしてよいであろう。つまり、六百有余首ある「藻屑」の歌数からすると、六首は決して大きな歌群ではないが、漢詩句を題として和歌を詠じるという創作方法が、秋成によって意識的に行われた、あるいは、意図的にまとめられたと考えられる。

このような観点から、この歌群における秋成の中国文学受容の様相の一端を探ってみたい。

ところで、秋成には、他にも句題和歌の作品が残されている。同じく『藤篋冊子』雑部に次のような和歌が見える。便宜上、先ほど挙げた六首に続き、通し番号を付けた。^③

雲有^二歸山情^一（くもきさんのじやうあり）

⑦まがはじと花にわかれて小初瀬に夕べはかへる春の浮雲

東坡云、佳茗似^二佳人^一（かめいはかじんにとたり）

⑧すむといひ清しと云もよき人の常とし聞けばあかぬ我友

⑦は卷二、雑の巻頭の天象を題とする歌群のうちであり、「雲」・「暁雲」題の歌が続いている。⑧は茶を詠じる歌群のうちの一首である。

『藤篋冊子』以外では、秋成が六十六歳の時に書いた『幽石軒記』^④に、

白雲挂幽石と云句のころを

⑨吹たゆる嵐のひまは峰にたついはほに雲のかゝりけるかな

が見え、また、六十八歳の時に編集して加島稻荷に捧げた『献神和歌帖』には、前出①「竹与心俱空」と⑦「雲有歸山情」

に並べて、次の句題和歌が見える。⁽⁵⁾

静談古人書

⑩いにしへの文のこゝろにしめされてとふもかたるも道にかなへる

⑦～⑩までの四首は前述の句題和歌歌群を構成する六首と、いささか性格を異にする可能性はあるだろうが、そのことに留意しつつ、これらの四首も秋成の句題和歌作品として、都合十首を考察の対象としておきたい。

二、句題和歌について

さて、このように漢詩文の一句を題として詠じた和歌を句題和歌と言うが、言うまでもなく、これは寛平六年（八九四年）に成った大江千里の『句題和歌』に始まる。宇多天皇の勅命を受けた千里が、「搜古句」構成「新歌」、すなわち、彼自身の詩文の素養を生かして古典的な漢詩から摘句し、それを題として新しい趣向の和歌を詠じることを試みたのであった。その後、定家や慈円などもそれに倣って、特に『白氏文集』から詩句を選び、句題和歌を詠んでいる。中世では、頼阿にも「句題百首」がある。さらに、近世の歌人に多大な影響を及ぼした三條西実隆にも「夏日詠百首和歌」という句題和歌があり、『雪玉集』に収められている。江戸初期には、下河辺長流が『詩経』と『文選』の句に即して句題和歌を詠んでいる。⁽⁶⁾江戸中期に至って、賀茂真淵の『賀茂翁家集』には僅か二首ではあるが句題和歌が残されており、秋成と親交のあった小沢蘆庵の『六帖詠草・六帖詠草拾遺』には、三十首に余る句題和歌が収められている。また、加藤千蔭の『うけらが花』、村田春海の『琴後集』、香川景樹の『桂園一枝』、伴蒿蹊の『閑田詠草』、富士谷成章の『北邊家集』などにも

句題和歌が見える。このように、江戸期の文人・国学者が漢詩句を題として句題和歌を詠じることは珍しくないことで、秋成の句題和歌もそうした流れの中に位置付けられよう。

大江千里の『句題和歌』については、金子彦二郎『平安時代文學と白氏文集―句題和歌・千載佳句研究篇―』⁷に精緻な研究がなされている。氏は同書では、『句題和歌』の後世への影響として、小沢蘆庵が千里と同じ句題で作った十首の句題和歌の中に、千里の和歌を本歌として詠んだ句題和歌があると述べ、小沢蘆庵に影響を与えていると論じておられる。近世の句題和歌研究としては、堂上については、嶋中道則氏の研究⁸があり、地下歌人に関して主に小沢蘆庵を中心に研究が進められている。その他に、岩崎佳枝氏⁹や、伊藤達氏¹⁰の研究などもある。両氏は主に、小沢蘆庵の句題和歌と中世句題和歌との関係、及び蘆庵の句題和歌の特徴について論じておられる。

また、鈴木健一氏の句題についての一連の研究がある。「近世句題和歌に関する一考察」¹¹では、小沢蘆庵、加藤千蔭、香川景樹の句題の抛る所を考察した上で、「句題選定」においては、「近世和歌全体が中世から連なるひとつの大きな繋がり的一部として捉えられるであろう」とされ、「近世句題和歌と出版―歌題享受の過程に関して―」¹²では、句題の選定状況から、一条派の堂上歌人と蘆庵等の地下歌人との関連について述べておられる。この論文では秋成にも触れられており、秋成に三条西実隆と同じ題で詠んだ和歌が二首①「竹与心俱空」¹³と⑦「雲有帰山情」¹⁴あることが指摘された。さらに、「歌題の近世的展開」¹⁵では「漢詩文の摂取による新しい句題」として、秋成の句題③「世人結交用黄金」・④「白眼看他世上人」・⑧「東坡云、佳茗似佳人」を挙げ、原典を指摘された。そして、この三つの題による和歌について前の二首は原詩の翻案で、三首目は句題と共通する言葉を使っていることを述べられ、和歌の解釈を示された。

なお、新日本古典文学大系『近世歌文集 下』の脚注に、原詩の指摘があるのは、②野渡無人舟自横―韋応物「滁州西澗」、③世人結交用黄金―張謂「題長安主人壁」、④白眼看他世上人―王維「与盧員外象過崔廋士興宗林亭」、⑤悔教夫婿覓封侯

―王昌齡「閨怨」、⑧佳茗似佳人―蘇軾「次韻曹輔寄壑源試焙新茶」である。

以上、現時点で、原詩が明らかにされているのは②③④⑤⑦⑧である。残る①⑥⑨⑩については、典拠を提案したいが、その詳細は以下に述べる。

三、秋成の句題和歌 ―句題和歌歌群六首について―

漢詩句を題として和歌を作るに際して、どのような詠作を試みたのか、ここでは、『藤篋冊子』の六首の歌群について、一首ずつ検討していく。

竹与心俱空（たけはこころとともにむなし）

①ためずとも直き心はおのづから竹とよもにやむなしかるべき

この句題和歌の歌意について、新大系では、「直き心はわざわざ手を加えずとも、竹のようにまつすぐで、南山の竹のように自然に認められることになるだろう」と解し、注に『孔子家語』五の「南山有竹、不揉自直」を挙げている。「揉」の字は『和名抄』によれば、「太^た無^む」と訓むとする¹⁶。和歌の「ためずとも直き」は指摘された通り、『孔子家語』に拠ったのかもしれない。しかし、従来指摘されていないが、この「竹与心俱空」は、いささか異同はあるが、次の白居易の詩に拠るものと考えてよいだろうと思う。和刻本『白氏長慶集』所収。

偶題閣下¹⁷ 序

^{たまたま}偶閣下の序に題す

上田秋成の句題和歌

静愛青苔院

静は愛す 青苔の院

深宜白鬢翁

深は宜し 白鬢の翁

貌将松共瘦

貌は松と共に瘦せ

心与竹俱空

心は竹と俱に空し

暖有低簷日

暖は簷に低るる日有り

春多颺幕風

春は幕を颺ぐる風多し

平生閑境界

平生の閑境界

尽在五言中

尽く五言の中に在り

この詩は長慶二年（八二二）、白居易が五十一歳で長安で中書舎人であった時に作られたものである。題にある「閣下」は鳳凰閣で、中書省を指す。偶々詩が出来たので、それを鳳凰閣に書いたと題で断った。そして、題の「偶」たまたまと一致させるために、一句から六句までは「静は…深は…」と同じ句構造を採り、わざと拙く見せる。尾聯では、自分の閑境についての考えは全部この詩の中に含まれているという。つまり、この一見拙い詩は白居易の精神世界を表している。詩の首聯では閑静で青い苔の広がる庭は白鬢の翁に相応しいと言つて、人物（白鬢の翁）を登場させる。頷聯はこの白鬢の翁についての描写で、超俗的な意味を持つ松と竹を使う。頸聯はこの庭の春の風景を描き、尾聯では生涯の閑境界はすべての詩の中に含まれていると言つて詩を終える。

句題とした第四句は、竹の芯が空であるところに精神性を懸けて、白鬢翁の心は、竹と同様に空で、老荘哲学の空の境地である、と言う。高い精神性を示す句である。竹の性質について、白居易は「養竹記」¹⁸の中で「固」・「直」・「空」・「節

貞」の四つを挙げています。そして、竹を君子に喩えている。つまり、この「空」は君子の備えるべき性質の一つであり、「無欲」とも解される。

秋成はこの詩の他の部分を捨て、この一句だけに注目して和歌を作った。和歌は、矯正しなくても本性として真つ直ぐな心は、真つ直ぐなのは同じでも竹と同様に虚しいだろうか、いや、むなしくはないはずだ、と現代語訳されるかと思う。「むなし」・「直き」・「ため」は竹の縁語で、よく用いられる修辞である。秋成歌はこのような竹の縁語仕立ての修辞を存分に利用した作である。しかし、漢詩では「空」は君子の持つべき性質を表す価値のある言葉であるのに対して、「むなし」と和語化した途端、充実していない・甲斐がない・無意味だ、という意味となり、価値の無いものとして否定されなければならぬのである。

『万葉集』に

山上臣憶良、沈痾の時の歌一首¹⁹

978 士^{そのこ}やもむなしくあるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして

が見え、この「むなし」は「為すことなし」と解されているから、秋成の和歌の「むなし」もその意味に近いと考えられる。なお、秋成の句題は「竹与心俱空」とあり、原詩、白居易には「心与竹俱空」とあって、「心」と「竹」の位置が変わっている。明暦三年（一六五七）刊の和刻本『白氏長慶集』にも「心与竹」と見え、「竹与心」を採る白居易の詩は未見である。また、前掲鈴木健一氏の指摘されるように、三条西実隆もこの句を句題としている。実隆『雪玉集』では「心与竹俱空」とあり、「竹」・「心」の位置は秋成の句題と異なっているが、『白氏長慶集』と一致している。

心与竹俱空⁽²⁰⁾

なよ竹の折へくもなくなひくこそ世にふる道の心なりけれ

実隆のこの和歌では、竹が折れ難いのは「空」であるから、心もそれと同じように柔軟であるべきだと言っている。秋成の詠み方とは異なっているが、白詩の「空」の意味を取っていないのは同じである。

つまり、秋成のこの歌は、句題の「竹―心―空」の語から発想して、竹の縁語で仕立てた一首と言える。「空」を「むなし」と和訓するため題の意味からも遠くなり、また、形の上でも否定となって、原詩の内容はほぼ和歌には投影していない。

野渡無人舟自横（やとひとなくふねおのづからよこたはる）

②冬枯の野川の風を身にしめてあはれやひとりわたり呼声

題の「野渡無人舟自横」は新大系の指摘通り、王孟韋柳と併称される中唐の山水詩人韋応物の詩に拠るものである。『唐詩三百首』・『三体詩』所収。

滁州西澗⁽²¹⁾

滁州の西澗

独憐幽草澗边生

独り憐れむ 幽草の澗边に生じ

上有黄鸝深樹鳴

上に黄鸝の深樹に鳴く有り

春潮帯雨晚来急

春潮 雨を帯びて 晚来急なり

野渡無人舟自横

野渡 人無く 舟自づから横たわる

「憐」は、対象に強く心を動かされることを言う。「幽草」は茂った草叢を言うが、「幽」は奥に何かを秘めたような、ひっそりとした趣を添える。山に囲まれた谷川のほとりにひっそりと草叢が生じ、その上の方の深い木立の中で、春のシンボルである「黄鸝」（鶯）が鳴く。生命を感じさせる「春潮」が、夜来の雨を受けて増水し、流れが急になった。野原の川の渡し場に人はなく、ただ舟がぼつんと横たわっている。何とも言えない寂寥感が描き出されている。特に転句の動に対して、結句の静寂が際立つ。ここでは、舟も自然の景物として風景の中に溶け込んでいる。

韋応物は第一句から第三句まで春を思わせる言葉を使っているが、結句にはそのような言葉を使っていない。結句だけを見る場合では季節は特定できない。秋成は季節感のない最後の一句を取って、それを冬の景色として詠んでいる。新大系の解釈とやや似ているかもしれないが、一首の歌意は、冬枯の野原を流れる川のほとりで、身にしみる冷たい風に吹かれながら渡し守を呼ぶ旅人の声が何ともあわれだ、と解せる。最初に「冬枯」という言葉で季節を冬に設定したのは、旅人のわびしさが最も際立たせるためであろう。題にある「野渡」を「野川の渡し守」と人に変えている。「わたり呼声」から舟守がいけない事、即ち「無人船」であることが分かる。「風を身にしめて」は俊成の歌「夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴なり深草の里」（千載集・秋上）を想起させるが、それで引き出された「あはれ」と「ひとり」は起句の「独憐」（独り憐れむ）を使っていると考えられる。起句の「幽草」と承句の「黄鸝」及び転句の「春潮」は「春」に繋がるため、捨てられている。和歌の「風」は原詩の「雨」から来ているかもしれない。最後に川を渡ろうとする人を「呼声」という形で登場させ、冬に相応しい舟守を待つ旅人の姿が描かれている。この和歌は「野渡無人舟自横」という叙景の一句を人

の登場することによって物語的に脚色し、季節を冬に設定したことによって、漢詩に増した寂しさが醸される。秋成のこの和歌は原詩全体のイメージを使って、想像力を生かして生まれたものとも言えよう。

世人結交用黄金（せじんまじわりをむすぶにおうごんをもちゆ）

③交りをこがねにむすぶ世の人のつひのこころぞつねなかりける

この題は、鈴木氏の論文や新大系の指摘通り、中唐詩人張謂の次の詩に拠ったものである。『唐詩選』『唐詩訓解』など所収。

題長安主人壁²²

長安主人の壁に題す

世人結交須黄金

世人 交りを結ぶに黄金を須^{もち}ゆ

黄金不多交不深

黄金多からざれば 交り深からず

縦令然諾暫相許

縦令ひ然諾して暫く相許すも

終是悠悠行路心

終に是悠悠たる行路の心

題となった起句は、世間の人は交際を結ぶのに金を必要とする、という。和歌の上の句は、この詩句をほぼそのまま写している。下の句も、原詩の結句「終是悠悠行路心」に拠ると思われる。「悠悠行路心」については、いささか解釈が必要であろう。この詩を、服部南郭は『唐詩選国字解』で次のように解釈している。

「世人：深からず」惣じて、世人の交りといふものは、黄金でも沢山とり扱ふ内は深く交りをすれども、貧になるとかまはず、交りも薄くなる。

〔縦令：行路の心〕たとひ「然諾いかにも」と、相見れば相許すゆへ、頼もしう思うても、つい金銀でもなくなり、貧になると、今まで懇意にした者が、「悠悠」と果てもない道通りの如く、見ぬ顔をしているやうになる。さてさて人と云ふものは実のないものぢや。

「悠悠行路心」を、果てしもない路ですれ違う人のような無関心な心、と解しているらしい。この語は、旅人によるべのない空漠とした心、頼りにならない希薄な心、というような解釈もあり得ると思うが、いずれにしても、簡潔に和語に置き換えることは容易ではあるまい。それを秋成は、「つねなかりける」とした。これは、原詩の転・結句に表現された心変わりを表したものと考えられる。「無常」から来た「つねなかりける」という歌句は、たとえば、

博通法師往紀伊国見三穂石室作歌三首（その二）

311 常磐なす石室いはやは今もありけれど住みける人ぞ常なかりける（万葉集 卷三 三二一）

の例が見え、『檣の杣』・『金砂』などの『万葉集』注釈書を作った秋成には、なじんだ文言だったはずである。

つまり、この句題和歌では、題の詩句をほぼそのまま写して上の句とし、下の句「つひのこころ」も原詩「終は、悠悠行路心」の語に拠りながら、核心の感懐の部分は、和語になりにくい原詩の表現を離れて、原詩の意を和歌的表現によって表したのである。

なお、原詩では「須」とあつたところが『藤篋冊子』では「用」となっている。服部南郭は「須」を「黄金を」もちゆ」と訓じているから、読み下しは同じことになるが、秋成が「用」としたことについては、「用」を探る本文も見当たらないため、間違つた記憶で書いた可能性がある。

白眼看他世上人（はくがんもてたのせじやうのひとをみる）

④よの中の人をさくればおのづから塵なき庭の松の下臥

この題は鈴木氏や新大系の指摘している通り、王維の「与廬員外象過崔処士興宗林亭」の結句を使ったものである。『三體詩』・『唐詩訓解』・『唐詩選』などの所収。

与廬員外象過崔処士興宗林亭²³ 廬員外象と崔処士興宗が林亭に過る

緑樹重陰蓋四隣 緑樹の重陰 四隣を蓋ふ

青苔日厚自無塵 青苔 日に厚うして自ら塵なし

科頭箕踞長松下 科頭にして箕踞す 長松の下

白眼看他世上人 白眼にして他の世上の人を看る

起・承句は、官に仕えないでいる処士、崔興宗の林亭の描写である。幾重にも茂る緑樹の陰が四隣を覆って隔て、地面の青い苔は、訪れる人もないまま日に日に厚くなって、自ら清浄である。転句「科頭」は冠や頭巾をつけないこと、「箕踞」

は足を投げ出して座ることで、不作法で礼儀にはずれた姿だが、それは、世俗を離れた、ゆったりとしてとらわれない心を表している。「白眼」は言うまでもなく、気に入らない人を白眼で見たという、竹林の七賢の阮籍の故事を踏まえたもので、このような清雅な林亭にいる人は、礼儀などにかまわず自由な境地で、阮籍のように世俗の人を喜ばない、と言つて、竹林の七賢になぞらえて、林亭の主人に賛辞を贈つたのである。

秋成の「よの中の人をさくればおのづから塵なき庭の松の下臥」の歌の意味は、世俗の人を遠ざけていようとする、自然、清浄な庭の松の木の下を臥所とすることだ、というのであろう。題にあった「世上人」は「よの中の人」と読み下され、「おのづから塵なき」は原詩二句目の「自無塵」を読み下したものである。「松の下臥」の言葉は、次のような例がある。引用及び番号は『新編国歌大観』による。

旅宿言志 住吉にて、月を見てよめる

月のみぞもりあかしつるもしほ草しきつのうらの松のしたぶし（守覚法親王集一二五）

旅宿時雨

もりもあへずまだきにぬるるたもとかなこず急しぐるるまつのしたぶし（嘉応二年住吉社歌合九〇 廿番右 敦頼）

この二例は、いずれもわびしい旅寝を表す。秋成がここで使った「松の下臥」は原詩三句目の「箕踞長松下」によつたのである。題の眼目である「白眼」は字面上では詠まれていないが、「よの中の人をさ」けるのは、気に入らないからであつて、「白眼」に相当する。つまり、題となつた一句は和歌の初句、二句にすでに詠まれていると考えられる。新大系では和歌を、「俗世間の人を避けて生きるのは、自分だけ清らかな庭に遊ぶこと。そのうちに松の木の下に寝そべつて、世間を白い眼

で睨むようになる」と、題を含む形で訳しているが、題はすでに詠まれていたため、更に付け加えることはないと思われる。この歌は、句題の意を核として初・二句に表し、原詩の語を利用しながら、王維の原詩のほぼ全体を踏まえて詠んだ歌であると言えよう。

悔教夫婿覓封侯（くゆらくはふせいをしてほうこうをもとめせしめしを）

⑤何にかく出し立けん劍太刀名のをしけくも今はあらなくに

この題は、従来指摘された通り、『唐詩訓解』・『唐詩選』などに載せる盛唐王昌齡の「閨怨」詩の結句である。

閨怨²⁴ 王昌齡

閨中少婦不知愁 閨中の少婦 愁ひを知らず

春日凝粧上翠楼 春日 粧ひを凝らして翠楼に上る

忽見陌頭楊柳色 忽ち陌頭楊柳の色を見て

悔教夫婿覓封侯 悔ゆらくは夫婿をして封侯を覓めせしめしを

詩題の「閨怨」は、夫と離れている女性の孤閨の寂しさ、つらさを言うものだが、この詩の若い妻は愁いを知らない、という意表を突いた書き出しである。愁いなど経験したこともないほど幼く、飾り立てた「翠楼」があるような立派な屋敷に住む言わば「箱入り」の妻なのである。彼女は、春のうららかな日、念入りに化粧をしておしゃれをし、楼に昇る。

そのような妻の描写には、閨怨のかけらもない。ところが、道の辺の楊柳の春の芽吹きの色を見た途端、夫を送り出した日のことを思い起こす。楊柳の生命力にあやかるとともに、旅立つ人に楊柳を手折って贈る習俗があり、楊柳を見て夫と別れたことを思い出したのであろう。彼女はその日、夫が功名を立てて出世することを夢みて送り出した。行先は辺境、あるいは戦場だったのであろう。ところが、今、夫の不在を認識し、もしかすると永遠の不在となる危うさを感じて、突然に激しく後悔するのである。詩の前半と結句の落差が、若く美しい妻の愁いの強さを印象づける。この閨怨の情を秋成は和歌に写そうとしたものと思われる。

秋成の和歌「何にかく出し立けん剣太刀名のをしけくも今はあらなくに」は、どうしてあんなふうに出して行かせたのであろう、立身出世など今は求めたりしないのに、と解せる。題の詩句の、夫に出世を求めさせたことを後悔する、という文言に沿って、一首の訳出は可能であろう。しかし、仮に、限定的に題の句しか踏まえないということであれば、今まで愁いなど何も知らなかった若妻が、春の陽光のなかで突然知った夫の不在の寂しさと、自身の思慮の無さへの後悔などは浮かんでこそ、一首は非常に浅薄なものになってしまう。秋成は原詩全体を踏まえた、若妻の悔悟の吐露と理解した。原詩全体によって描き出された状況とそれによる感懐が、結句の「悔」に凝縮していると捉え、その情を和歌に表現しようとしたものと考えておきたい。

また、この和歌の「剣太刀名のをしけくも」は、『万葉集』に見える表現である。

2499 わぎもこに恋ひしわたれば、剣刀名の惜しけくも念ひかねつも

2984 剣刀名の惜しけくも吾は無し此のころの間の恋の繁きに

616 剣大刀名の惜しけくも吾は無し君にあはずて年の経ぬれば

このように専ら恋歌に用いられ、恋のために「名の惜しけくも（なし）」と言うのだが、六一六歌は山口女王が大伴家持に贈った五首の歌の一首で、そのなかに次のような歌もある。

613 物念ふと人に見えじとなま強に常に念へり在りそかねつる

この歌や、次の家持歌などを参考にすると、

732 今しはし名の惜しけくも吾は無し妹に因りては千遍立つとも

誰かに恋をしていると人に知れたり噂が立ったりすると自分の名に傷がつくが、恋心の激しさのために自分の評判を気に掛けている余裕などないのだ、という意味だと考えられる。『万葉集』に精通している秋成が、恋の激しさを表すこの表現を誤用して、立身出世を求める意に用いたとは考えにくい。むしろ、「剣太刀」に夫の出征を響かせるべく、自在に転用したと考えるよいのではないか。結句の「あらなくに」も、『万葉集』に圧倒的に例が多い。秋成は、この一首を万葉調に仕立てようとしたものと思われる。

つまり、この一首は、原詩の結句を題として、そこに集約されている感懐を、その詩中の人物の感情の吐露の趣で表現したものである。内容的には原詩全体を踏まえた詠み方であるとも言い得る。ことばは、万葉語・万葉的表現を自在に使い、万葉調に仕上げている。

調与時人背、心將静者論（てうはじじんとそむきこころはせいじやのろんをもつてす）
⑥我をしる人しなければ我しらぬ人に見すべきこと草もなし

この題は、新大系では指摘されていないが、「楓橋夜泊」で知られる盛唐の詩人張繼の次の詩に拠ったものである。『全唐詩』所収、読みは筆者による。

感懷

感懷

調与時人背

調 時人と背たがひ

心將静者論

心 静者と論ず

終年帝城裏

終年帝城の裏

不識五侯門

識らず 五侯の門

張繼は襄州（今湖北省）の人で、天宝十二年（七五三）に進士及第した。最初に長安に出てきた時、高い気節を持って、この詩を作ったという。²⁵「感懷」は、その気節を表現したものである。

第一・第二句は対句を成す。二句を新大系は「こころはせいじやのろんをもつてす」と読み下しているが、一句目と対応させて「心 静者と論ず」と読みたい。「調」は、その人物の内面が外表に表れたところの、趣、態度で、「調」と「心」をもってその性向を表す。すなわち、私の姿勢、態度は一般の人々に相反しており、心は静者と語り合いたい、と言う。

「静者」は、たとえば『莊子』天道²⁶に言う、「虚静恬淡、寂漠無為」を心のもちようとして体現している人で、それを生き方として実現すれば隱遁となる。第三・第四句は、このような自分であるから、ずっと都に住んでいても、五侯（権力者）はどこに住んでいるかは知らない、面識もない、つまり、権力者に諂わないと、具体的な生き方を述べるのである。

秋成の和歌「我をしる人しなれば我しらぬ人に見すべきこと草もなし」は、「私のことを分かってくれる人はいないのだから、私を知らない人にわざわざ見せるべき言葉（作品）もない」という意味で、題の「調与時人背、心将静者論」と字面上での重なりは見えない。しかし、「我をしる人しなれば」は「自分を理解してくれる人がいないから」で、それは「自分の考え方は他の人とは違う」即ち「調、時人と背」うからである。「我しらぬ人に見すべきこと草もなし」は「我を知らない人に見せる言葉もない」という意味で、「私を知る人と（作品の）話をしたい」という裏の意味が読み取れる。「我をしる人と話したい」は題の後半の「心、将静者と論ず」である。張継の詩は、権力者におもねる時人に与しない自身の矜持を読むのに対して、秋成の場合は、周囲の無理解への反発である。

つまり、この歌では、題の詩句の意への全面的な共感から詠作されたと思われるが、秋成自身の述懐とされたため、内容的には懸隔のある屈折したものとなったのである。

以上、六首の詠歌について概観すると、句題の語「竹―心―空」を用いて、和歌伝統によって作歌した①、句題とした漢詩句の意に共感して、句題の語を利用せずにその意をうつした⑥、句題の情趣（寂寥感）を、句題の景を利用しつつ表そうとした叙景的な歌②、原詩の情緒（悔悟）が凝縮された句を題として、詩中の人物の吐露の形で閨怨の感情を表す⑤、句題から上の句を作り、原詩の語を援用しつつ下の句を作る④、同じく句題から上の句を作るが、原詩の趣を和歌的にうつして下句とした③。このように、様々なパターンの作り方が見られる。句題として選定された詩人も重ならず、詩の様式も山水詩、閨怨詩、述懐詩など、多様である。わずか六首で、結論めいたことをまとめるのは難しいが、あえて言うと、

秋成は、この句題和歌群において、様々な詩人の様々な様式の詩を採択し、様々なパターンの詠作を試みようとしたと言える。そのような意趣を示そうとしたのが、この句題和歌歌群の意味であると考えている。

詩人について重なりがないと述べたが、すべて、盛唐・中唐の詩人であることが指摘できる。後述するが、秋成は謝靈運と蘇軾の詩も句題としているので、この歌群の詩人が、そのような範囲に限定されていることは注意すべきである。しかし、なぜそうなっているのかについては、今後の課題としたい。

四、秋成の句題和歌 — 句題和歌歌群以外の歌について —

以上の考察を踏まえて、歌群以外の四首について簡単に触れておく。

『藤篋冊子』巻二、雑部冒頭に天象を題とする歌群があり、そのうちに次の一首がある。

雲有帰山情（くもきさんのじゃうあり）

⑦まがはじと花にわかれて小初瀬に夕べはかへる春の浮雲

この題は、前掲鈴木健一氏の指摘のとおり、三条西実隆と重なり、出典は白居易の次の詩に拠るものである。

早送举人入試²⁷⁾

早に举人の試に入るを送る

夙駕送举人 東方猶未明

夙に駕して举人を送れば、東方猶ほ未だ明けず

自謂出太早

已有車馬行

自ら謂へらく出づること太だ早しと、已に車馬の行あり

上田秋成の句題和歌

騎火高低影

街鼓參差声

騎火高低の影、街鼓參差の声

可憐早朝者

相看意氣生

憐む可し早く朝する者、相見て意氣生ず

日出塵埃飛

羣動互營營

日出でて塵埃飛び、群動いて互ひ營營

營營各何求

無非利与名

營營として各何をか求むる、利と名とに非ざる無からんや

而我常晏起

虚住長安城

而るに我常に晏起し、虚しく長安城に住す

春深官又滿

日有歸山情

春深うして官又滿つ、日に歸山の情有り

この詩は永貞元年（八〇五）白居易が三十四歳の時の作で、当時白居易は校書郎で、長安に居住していた。科挙を受ける挙人を送るために未明に起きると、すでに出勤する人々がいて驚く。利と名を求めて營々とする人々に比べて、自分はいつも遅くまで寝ている、自分は長安にずっと住んでいるけれど、やがて春が深くなり官職も終わる、日々に山に入つて隠居したい気持を持っている、と言う。すなわち、「歸山の情」をもっているのは詩人自身で、また、原詩には「雲」が関わる契機は全くない。したがって、「雲——」を題とするこの和歌は、原詩の句題以外の部分には全く関わらない。改変された句題のみから発想した作歌であるのは、①「竹与心俱空」と同じである。

原詩は「日有歸山情」とあり、「雲——」とあるのは疑問であるが、実隆『雪玉集』に「雲有歸山情」とあり、さらに、小沢蘆庵『六帖詠草』には秋成と同じ「雲有歸山情」とあつて、少なくとも「雲——」の異文は、秋成の過誤、あるいは独自の改変ではない。

秋成が作った和歌「まがはじと花にわかれて小初瀬に夕べはかへる春の浮雲」は、新大系では「吉野山の空が夕焼けに染まるころ、見間違えられないように、桜に別れを告げて夕べごとに初瀬山へ帰っていくことだ、春の浮き雲は」と解され、

本歌として『千載集』春上にある藤原重家の「をはつせの花のさかりをみわたせば霞にまがふみねのしら雲」が挙げられている。「小初瀬に」つまり山に「かへる」「雲」は題の「帰山」「雲」に即している。「まがはじ」は雲の「情」とも読める。秋成は忠実に題に沿ってこの和歌を作ったと言える。

実隆の句題と重なる例がもう一首、『猷神和歌帖』に見える。

静談古人書

⑩いにしへの文のこゝろにしめされてとふもかたるも道にかなへる

これは、次の白居易の詩に拠るものと思われる。白詩では「静読古人書」とあるが、実隆『雪玉集』には「静談古人書」とあるので、秋成もそれに拠ったのであろう。

詠拙²⁸

拙を詠ず

所稟有巧拙	不可改者性	稟くる所巧拙有り、	改む可からざる者は性なり
所賦有厚薄	不可移者命	賦せらるる所厚薄有り、	移す可からざる者は命なり
我性拙且慙	我命薄且屯	我が性拙にして且つ慙 ^{ちゆうか} なり、	我が命は薄にして且つ屯 ^{ちゆうん} なり
问我何以知	所知良有因	問ふ我何を以てか知る、	知る所良 ^{まこと} に因有り
亦曾拳兩足	学人蹋紅塵	亦曾て兩足を拳げ、	人を学んで紅塵を蹋 ^ふ む
從茲知性拙	不解轉如輪	茲 ^よ に従りて性の拙を知る、	轉じて輪の如くなるを解せず

亦曾奮六翮 高飛到青雲

亦曾て六翮を奮ひ、高く飛んで青雲に到る

從茲知命薄 摧落不逡巡

茲に從りて命の薄を知る、摧（くだ）け落ちて逡巡せず

慕貴而厭賤 樂富而惡貧

貴を慕ひて賤を厭ひ、富を樂しんで貧を惡む

同此天地間 我豈異於人

此の天地の間、我豈に人に異ならんや

性命苟如此 反則成苦辛

性命苟（まこと）に此の如し、反すれば則ち苦辛と成る

以此自安分 雖窮每欣欣

此を以て自ら分に安んじ、窮すと雖も毎に欣欣たり

葦茅爲我廬 編蓬爲我門

茅を葺いて我が廬と爲し、蓬を編んで我が門と爲す

縫布作袍被 種穀充盤飧

布を縫うて袍被と作し、穀を種ゑて盤飧に充つ

靜讀古人書 閑釣清渭濱

靜に古人の書を読み、閑に清渭の浜に釣る

優哉復游哉 聊以終吾身

優なる哉復游なる哉、聊か以て吾が身を終へん

白居易の詩は、自身の性情の拙さを言い、榮達を求めず質朴な生き方を守って一生を終えよう、と云うのであるが、その生活態度の具体の一つとして、「靜讀古人書」が挙げられる。一人靜かに古人の書を読み味わおう、とするのである。

和歌では、「古人書」が「いにしへの文」と読み下されるが、そこでは「道にかなう生き方を示すものとしてあり、そのような「いにしへの文」に導かれながら、人と語り合うことは、自然と人の道にかなうものだ、と云う。「讀」と「談」では具体的な姿に大きな違いがあり、結果として、原詩の趣旨は和歌には投影していない。やはり、題の詩句にのみ拠つた作歌と言えよう。

東坡云、佳茗似佳人

⑧すむといひ清しと云もよき人の常とし聞けばあかぬ我友

この題は鈴木健一氏と新大系が指摘されたように、蘇軾の「次韻曹輔寄壑源試焙新芽」から採ったものである。

次韻曹輔寄壑源試焙新芽²⁹ 曹輔が壑源に寄せ新芽を試焙するに次韻す

仙山靈雨濕行雲 仙山の靈雨行雲に濕ふ

洗遍香肌粉未勻 香肌を洗ひ遍くして粉未だ勻はず

明月來投玉川子 明月來り投ず玉川子

清風吹破武林春 清風吹き破る武林の春

要知冰雪心腸好 冰雪心腸の好きを知るを要す

不是膏油首面新 是れ膏油首面の新たなるにあらず

戲作小詩君勿笑 戲れに小詩を作る君笑ふこと勿かれ

從來佳茗似佳人 從來佳茗は佳人に似たり

原詩の最終句「從來佳茗似佳人」を、「佳茗似佳人」の五言として用いている。秋成の和歌について、鈴木健一氏は前掲「歌の近世的展開」で、「秋成歌の意は、「佳茗」や「佳人」の共通性として「すむ」「清し」という点があるが、そういう人であればこそ飽きることなく我が友でいられることだ、となろう。」と、「我友」を人を主として解しておられる。しか

し、この歌は茶を詠じる歌群の内の一首であるから、「我友」は主として茶を指していると考えるべきである。すなわち、澄むとか清しというのは佳人の常であると言われているが、そのような性質を備えているお茶は佳人と同じく、常に我友としていたいのものだ、となるだろう。

よい茶を「佳人」に喩える句題から発想した歌で、語・内容とも原詩に拠るところはほとんど見られない。また、蘇軾が作ったお茶関係の詩文はよく茶書に引用されるため、蘇軾のこの詩から採ったというより、茶書から採った可能性もある。句題のみに拠る作歌とも言えよう。

白雲挂幽石と云句のころを

⑨吹たゆる嵐のひまは峰にたついはほに雲のかゝりけるかな

『幽石軒記』に見えるこの句題は、謝靈運の次の詩に拠ると思われる。『文選』所収。

過始寧墅一首⁽³¹⁾ 五言

始寧の墅に過る一首 五言

束髮懷耿介 逐物遂推遷

束髮より耿介を懐けるも、物を逐ひて遂に推し遷る

違志似如昨 二紀及茲年

志に違ふこと昨の如きに似たるも、二紀にして茲の年に及べり

緇磷謝清曠 疲爾慙貞堅

緇磷して清曠を謝り、疲爾して貞堅に慙づ

拙疾相倚薄 還得靜者便

拙疾相倚薄し、還つて靜者の便を得たり

剖竹守滄海 枉帆過旧山

竹を剖ては滄海に守たり、帆を枉げては旧山に過れり

山行窮登頓 水涉尽洄沿

山行して登頓を窮め、水涉して洄沿を尽くせり

巖峭嶺稠疊 洲縈渚連綿

巖は峭しうして嶺は稠疊たり、洲は縈りて渚は連綿たり

白雲抱幽石 緑篠媚清漣

白雲幽石を抱き、緑篠清漣に媚ぶ

葺宇臨廻江 築觀基曾巔

宇を葺いて廻江に臨み、觀を築いて曾巔に基す

且為樹粉檣 無令孤願言

且く為に粉檣を樹るよ、願言に孤かしむる無かれと

この詩は永初三年（四二二）に、謝靈運が永嘉太守に任ぜられ、途上に始寧の別荘に立ち寄った時に作った詩である。前半は始寧に立ち寄ることに至った経緯を述べ、後半は始寧の風景を描いくが、「白雲抱幽石 緑篠媚清漣」の対は自然描写の妙句として知られる。

秋成の和歌の題は「白雲挂幽石」になっていて、原詩の「白雲抱幽石」とは一字異っている。歌の「吹たゆる嵐のひまは峰にたついはほに雲のかかりけるかな」では、「峰にたついはほ」は「幽石」であり、「雲のかかりける」は「白雲挂」を言い変えたものと思われる。改変された句題にのみ拠る作歌と言える。

五 ま と め

以上個別に分析した結果を次のように纏めておく。

①の和歌は「竹与心俱空」の一句だけに沿って作られた。このように、句題を読み下したように作られた和歌は他に⑨⑩がある。

②の和歌は春の叙景詩である原詩に反して、冬の景色を詠んでいる。原拠詩と大分離れているが、句題から想像力を生

かして作られた和歌である。

③の歌は題となった「世人結交用黄金」の一句の他、他の詩句の内容も使われている。この和歌は詩全体を踏まえて作られた。④の和歌も同じ詠み方である。

⑤の和歌も題の一句だけに沿って作られたものであるが、①と違って、単に漢字を和語に読み下したのではなく、「覓封侯」を「劍太刀名」と読んだように、完全に日本風に訳している。同じ作り方で作られたのは⑥⑦⑧である。

つまり、漢詩を和歌に作り直す時の方法を見ると、秋成は様々な作り方を試している。一句だけに即して作る場合と詩全体を踏まえて作る場合、そして漢語を和訓して作る場合と完全に日本風にして作る場合があることが分かる。

また、秋成が採った句題の原詩をみると、殆どが『唐詩選』(三首)や『唐詩三百首』(一首)、または『文選』(一首)など当時ではポピュラーな詩文集から選ばれたものである。煎茶に興味があることから、茶書に見えるような蘇軾の詩からも採っている。

更に、白居易の三首の詩から採った句題に即して、秋成だけではなく、三条西実隆も和歌を作っていることから、実隆の秋成に与えた影響が窺える。『猷神和歌帖』では、その三首が並んでいる。意図的な並び方である可能性がある。秋成が句題和歌を作った契機は実隆にあるかもしれない。秋成と実隆の関係についてまだ検討する余地はあるが、他稿に譲る。いずれにせよ、秋成は中国古典文学の受容の一環として、漢詩を日本化にする試みをしていたことは明らかである。

注

(1) ①②③④⑤⑥の引用は『近世歌文集下』(新日本古典文学大系六十八、鈴木淳、中村博保校注、岩波書店、一九九七年八月)五〇一番
〜五〇六番の歌による。句題の読み下しも同じ。

(2) 注(1)前掲書の中村博保氏による解説『藤篋冊子』の世界」には、「意に染まぬ秋成に昇道が奨めて刊行にふみ切らせた経

緯は巻頭の昇道の「附言」に詳しいが、実際は秋成の積極的な意図が働いていたものと推測されている」と述べている。また、風間誠史氏も著書『近世和文の世界―蒿蹊・綾足・秋成』（森話社一九九八年六月）で、『藤篋冊子』は秋成の意志を反映したテキストであると述べている。

- (3) ⑦、⑧の引用は注(1) 前掲書の四三三番と五九九番の歌による。句題の読み下しも同じ。
- (4) 引用は『上田秋成全集』第十一卷(二〇二頁、中央公論社、一九九四年二月)による。
- (5) 引用は『上田秋成全集』第十二卷(八二頁、中央公論社、一九九五年九月)による。
- (6) 『晩花集』校注国歌大系第十五卷(近代諸家集一、復刻版、一九七六年十月、講談社)。
- (7) 増補版(藝林舎、一九五五年)。
- (8) 嶋中道則「近世堂上和歌と漢文学―句題和歌をめぐって」(『近世堂上和歌論集』所収、明治書院、一九八九年)。
- (9) 岩崎佳枝「句題和歌の系譜―三条西実隆から小澤蘆庵へ―」(『和歌文学研究』巻五十、一九八五年)。
- (10) 伊藤達氏「小沢蘆庵の句題和歌について」(『別冊論輯』駒沢大学大学院国文学会、二〇〇三年二月)。
- (11) 鈴木健一「近世句題和歌に関する一考察」(『国語と国文学』、一九八八年三月)。
- (12) 鈴木健一「近世句題和歌と出版―歌題享受の過程に関して―」(『和歌文学研究』巻五七所収、和歌文学会、一九八八年二月)。
- (13) 三条西実隆の句題は「心与竹俱空」になっている。
- (14) 三条西実隆の題は「雲有帰山惜」となっている。
- (15) 鈴木健一「歌題の近世的展開」(和歌文学会編『和歌文学の世界』巻一五所収、笠間書院、一九九二年)。
- (16) 十卷本『和名類聚抄』巻五「ゆみたま繁」の項目に見える。
- (17) 『白楽天全詩集』巻十九九一三頁(続国訳漢文大成、佐久節注釈、日本図書センター、一九七八年六月)。
- (18) 『養竹記』の日本古典文学に、特に平安文学に与えた影響について、後藤昭雄氏は「菅原道真の詠竹詩」(『平安朝文人志』所収、吉川弘文館、一九九三年十一月)で、新聞一美氏は「菅原道真の「松竹」と源氏物語」(『菅原道真論集』所収、勉誠出版、二〇〇三年)で論じておられる。

- (19) 『万葉集』からの引用は全部『新潮日本古典集成』(新潮社、一九七八年十一月)による。
- (20) 『雪玉集』巻第八(二八一頁、『私家集大成』第七巻、和歌史研究会編、明治書院、一九七六年)。
- (21) 『唐詩三百首』第三巻(六九頁、目加田誠訳注、平凡社、一九七五年二月)。
- (22) 『唐詩選国字解』巻七(一九七頁、服部南郭述、日野龍夫校注、東洋文庫、平凡社、一九八二年)。
- (23) 注(22)前掲書(二四九頁)。
- (24) 注(22)前掲書(二二九頁)。
- (25) 『唐才子傳之研究』(布目潮風・中村喬著、汲古書院刊、一九七二初版、一九八二訂正重版)。
- (26) 『莊子集釋』巻五中、外篇大道第十三(増訂中國學術名著、楊家駱主編、世界書局、一九六二年)。
- (27) 『白樂天全詩集』巻五(四〇七頁、続国訳漢文大成、佐久節注釈、日本図書センター、一九七八年六月)。
- (28) 注(27)前掲書巻六(五二三頁)。
- (29) 復刻愛蔵版『蘇東坡全詩集』巻四(五八二頁、岩垂憲徳・久保天随・釈清潭註解、日本図書、一九七八年)。
- (30) 蘇軾のお茶に関する詩文は秋成の茶書『清風瑣言』に引用されている他、大枝流芳作『青湾茶話』(『日本の茶書』下、七二頁、東洋文庫、一九七五年七月)にも引用されている。
- (31) 『文選』(詩騷篇)三(七三八頁、全釈漢文大系二八、集英社、一九八六年九月)。

付記

本稿の①く⑥の漢詩の読解は、本学非常勤講師川合康三先生が御担当の漢文学特殊研究(平成十八年度)に行った『唐詩訓解』をテキストとする演習に、その多くを拠っている。

また、本学教授新聞一美先生には、稿を成すにあたって、懇切なご指導を頂いた。あわせて感謝を申し上げます。

(本学博士課程後期課程)